

2016

ティーチングポートフォリオ —母校の発展を目指すこれからの8年—



岩野雅子

公立大学法人山口県立大学

国際文化学部・国際文化学研究科

2016/01/30

目次

0. はじめに

1. 教育の責任

- 1-1. 大学・国際文化学部・国際文化学研究科の目的
- 1-2. 国際文化学に関する担当科目
- 1-3. 学生指導、委員、学会活動等

2. 私の教育理念

- 2-1. 学ぶことの楽しさを伝えること
- 2-2. 実体験にもとづいた異文化理解をすすめること
- 2-3. 学びのプロセスや成果を形で見せること
- 2-4. 出身大学に自信と誇りをもつこと

3. 教育方法

- 3-1. 学ぶことの楽しさを伝えるために
- 3-2. 実体験にもとづいた異文化理解をすすめるために
- 3-3. 学びのプロセスや成果を形で見せるために
- 3-4. 出身大学に自信と誇りをもつために

4. 教育成果

- 4-1. 授業評価
- 4-2. 国際理解教材の作成
- 4-3. 授業で使用するテキストの発行
- 4-4. 海外スタディツアー報告書の公開
- 4-5. 教育方法の改善に関する取り組みの発表

5. 教育の改善

- 5-1. 個人として：研修への参加
- 5-2. 教員チームとして：テキストの発行
- 5-3. 学部として：外部資金の導入と学会全国大会の引き受け

6. 今後の教育目標

- 6-1. 短期的な目標
- 6-2. 長期的な目標

0. はじめに

私は、本学の前身となる山口女子大学文学部児童文化学科の第3期生である。1994年に卒業生の一人として本学の国際文化学部で教鞭をとる機会を得て21年になる。

2年前の2014年にティーチングポートフォリオを作成したが、それ以後、国際文化学部長として一部署を発展させる立場から、副学長として全学の発展を視野に入れる立場へと移行し、大きな意識変革を行う経験を経た。前者においては、1学部2学科の在学学生約350名、教員約35名、卒業生約1,500名を視野に入れるだけでよかったが、後者においては3学部5学科・2研究科の在学学生約1,400名とその保護者のみならず、全学的な部署や組織全般、約160名の教員・職員、学外の関連団体の方々、1万人以上の卒業生等々、広い視点と高い目標を持たねばならなくなった。

本学に勤務する期間も残り8年となったこの時期に、ティーチングポートフォリオを見直し、国際文化学部及び国際文化学研究科で担当する科目を中心に、今後の教育面における目標を定める。

1. 教育の責任

1-1. 大学・国際文化学部・国際文化学研究科の目的

大学の目的は、「地域における知の拠点として、住民の健康の増進及び個性豊かな地域文化の進展に資する専門の学術を深く教授研究する」という本学の2つの教育目標のうち、国際文化学部は後者の役割を担う学部である。この2つのアプローチを通して、最終的には「人々が生き生きと暮らす社会の形成に資する人材を育成する」。

国際文化学部の目的は、「国際的視点を持ち、地域の諸課題に対応できる教養及び技能を備え、地域の国際化、個性豊かな地域文化の振興と創造に資する人材を育成すること」としている。学際的な領域からなる国際文化学部は、文化と文化の間で生じる様々な事象を取り扱う Faculty of Intercultural Studies である。一方で、私が担当する最も大切な科目「異文化交流論」も Intercultural Studies といい、学部名（学科名も同じ）と科目名が同じことから、大きな責任と使命感を胸に教育に携わってきた。

国際文化学研究科の目的は、「教育研究を通して、グローバルな感覚を磨き、社会の国際化に対応できる、高度の異文化交流能力とともに、地域の歴史・文化の深い理解に基づき、地域文化を新たに発掘・創造できる能力を備えた人材の育成を目的とする。」

(資料A参照：履修の手引き、学部HP)

1-2. 国際文化に関する担当科目

国際文化学部においては2015年に開始した新カリキュラムにより、担当科目が大きく変更した。

- ・「異文化交流論」(1年生国際文化学部基幹科目、110名、15回、2単位)
- ・「欧米文化論」(1年生国際文化学科基幹科目、60名、15回、2単位) オムニバスで6回担当
- ・「アジア社会論」(2年生国際文化学科基礎科目、60名、15回、2単位) オムニバスで3回担当
- ・「Yamaguchi and the World」(2年生、20名程度、15回、2単位、英語で行う授業)
- ・「フィールドワーク実践論」(2年生、60名、15回、2単位) チームティーチング7名による担当
- ・「地域実習 I s」「地域実習 I e」(2年生以上、60名、各30回、各2単位) チームティーチング7名による担当、sはサービ斯拉ーニング、eは企業・企業向けのアントレプレナー

- ・「地域実習Ⅱs」「地域実習Ⅱe」（3年生以上、60名、各30回、各2単位）チームティーチング7名による担当、sはサービスラーニング、eは企業・企業向けのアントレプレナー
- ・「グローバルネットワーク論」（2年生以上、15回、2単位）3-5名によるチームティーチング
- ・「専門演習Ⅰ」「専門演習Ⅱ」（3年生、各6名程度、各15回、各2単位）
- ・「卒業演習Ⅰ」「卒業演習Ⅱ」（4年生、各6名程度、各15回、各2単位）

国際文化学研究科における担当科目には変更はない。

- ・「多文化教育論」（大学院生、4-6名程度、15回、2単位）
- ・「国際文化学研究Ⅰ」「国際文化学研究Ⅱ」（大学院生、4名程度、15回、2単位）
- ・「国際文化学研究法」（大学院生、10名、3回オムニバス分担、2単位）

以上、16科目（半期8科目）を担当している。 [（資料B参照：担当科目一覧、シラバス）](#)

1-3. 学生指導、委員、学会活動等

担当するチューター学生は、例年、3年生約6-8名、4年生約6名、大学院生約2-3名程度であり、年間を通して約14~17名を担当している。チューター会（昼食会、夕食会、交流会等）を開催し、できるだけ接する機会をもつようになっている。一週間の日程を研究室のドアに掲示し、講義や会議等、居場所がわかるようにし、オフオスアワーも設けている。

学内委員としては、過去に教務委員、学生委員、入試管理委員、国際交流委員、環境管理委員、入試戦略委員、教育研究推進委員会委員、教育研究評議会委員等を務めた。学部学科では、学部だよりの編集、学部同好会 facebook の創設、学科の実習担当者会議、新カリ構想委員会などを主導してきた。現在では、入学者選抜委員会、教育研究推進委員会、点検評価委員会という3つの委員会の委員長を務めている。

学外委員としては、過去には（財）山口県国際交流協会専門委員、日本国際連合協会山口県本部理事、山口県「新やまぐち国際化推進ビジョン策定委員会」副委員長、山口県学力向上フロンティアハイスクール協議会委員、山口県立下関中高一貫学校運営指導委員会委員長、宇部ユネスコ英語暗唱弁論大学審査委員長などを務めてきた。

現在では、山口県私立学校審議会、山口県男女共同参画委員会などの委員長を務めている。

本学同窓会桜園会の理事であり、学内で卒業生教職員がつくる「ケラスス（桜）の会」に属して活動をしている。

学会活動としては、多文化教育学会査読委員、日本国際文化学会査読委員、同常任理事及び事務局長の責務を担っている。

[（資料C参照：研究室HP、学会HP、学部同窓会 facebook）](#)

2. 私の教育理念

2-1. 学ぶことの楽しさを伝えること

学生一人一人に目を向けた主体的な学びを促進する教育を通して、学生が自ら学びたいという動機をもち、能動的に学ぶ楽しさを知ることができるような教育を行っている。学ぶ内容は重要であるが、学ぶ方法や学ぶ習慣が身につくことがより大切である。

2-2. 実体験にもとづいた異文化理解をすすめること

机上の知識だけでなく、実社会での体験を踏まえて異文化交流や多文化共生の現場で求められる専門性が身につく教育を行っている。異文化理解、国際交流、異文化交流、異文化コミュニケーションは、人と人との間で行われる。実際に海外に行けば、言葉や文化、習慣、価値観などで大きなカルチャーショックを受けるが、それに耐え、わからないことを許容し、切り抜けるための生きた知恵が必要になる。

2-3. 学びのプロセスや成果を形で見せること

学ぶことが楽しいということは、学び初めにドキドキ、ワクワクするものがあり、学びの途中が楽しく、学んだあとに充実感や達成感がある。ゴールが見え、そこに向かっていくという手ごたえを感じることができれば、学生たちの学びの満足度は大きくなり、成長もまた大きい。

チームティーチングであれば、教員同士がお互いに意見やアイデアを出し合い、優れたものを取り入れつつ、学び合う楽しさもある。学びの成果や学生の成長、到達度をエビデンスで示し、説明できることを目標としたい。

2-4. 出身大学に自信と誇りともつこと

国際文化学という専門分野が発展し、国際文化学部が人々の間に広く周知され、存在感が増すことにより、国際文化学部を卒業する(した)学生やそこに所属する教職員が自らの出身に対して誇りと自信がもてるようになる。学生はもとより、自分自身のためにも、教育活動を通して自信と誇りを高められる教育がしたい。

3. 教育方法

3-1. 学ぶことが楽しいという学生を育てるために

教員が学生一人一人を見ているという確認のサインを出し続けることが、学生の成長を促すことにつながる。大人数のクラスでこれを実現するため、LMSも活用しつつ、次のような教育方法をとっている。大変であるが、ゲームのように一つ一つをクリアしていく達成感があり、すべてを達成した後に能力が高まったという実感も得ることができる。結果的に多くの資料を読み、課題をこなし、レポートを書いてフィードバックを得、他の学生とも意見交換をして多角的な視点を得ることができるので、学び方や学ぶ楽しさを味わうことができる。

- ・ **事前学習**：教科書(テキスト)を指定し、毎回、授業の前に読んでくる章を指定して、ウェブ上で小テストを受けさせる。
- ・ **出席確認**：個人で、あるいはグループで討論したことを、毎回出席を確認することも含めて短いコメントを書かせて提出させている。
- ・ **事後学習**：授業で用いたパワーポイント資料をウェブ上にあげ、授業後に資料を見直したり、関連するサイトを閲覧したりできるようにしている。
- ・ **視聴覚教材**：本で読み、講義で聞いたことについて具体的なイメージがわくよう、DVDやYou Yubeなどを短い時間見せるようにしている。

- ・ **ワークショップ**：国際理解教育、開発教育、地球市民教育等で用いられるワークショップ、シミュレーション、ロールプレイ等の教材を活用し、具体例に即して考えさせている。
- ・ **レポート返却**：授業の途中に2回程度書かせるレポートは、点数とともにコメントを書き入れたものをフィードバックし、次の改善につながるようにしている。
- ・ **ICEモデルの導入**：レポートで何をどう書くかを明確にするため、ICEモデル（カナダで開発）を導入し、構成要素、論理的つながり、主張をささえる論拠を示す「型」にそって書けるように指導している。
- ・ **チュートリアル**：演習においては特に、1対1で学生と向き合う時間を大切にしている。プレゼンテーション前には2回のリハーサルを行って個別に改善し、卒業論文や修士論文は各章が提出される度に細かくコメントをつけて返却し、何度も修正の手を加えたものを仕上げていく過程を重視している。
- ・ **意見の共有**：グループ分けをして討論をしたり、企画を立てるような学習の場合は、短い時間で全体に発表する機会を設け、限られた時間で他者に伝える力や、他と情報を共有してコメントをもらい多様な視点を受け入れる姿勢を育てている。

(資料E：LMS画面、レポート例、コメントカード例、ICEモデルの型)

3-2. 実体験にもとづいた異文化理解をすすめるために

国際文化学科には、主として言語科目を担当する言語担当者会議と、臨地実習を担当する実習担当者会議がある。私は後者において7名の教員からなる実習担当者会議の進行を進め、チームティーチングのあり方を模索してきた。

ここでは学生が失敗をすることや、失敗から学ぶことを予想した学習を組んでおり、同時に、重大事故に至るような失敗は未然に防ぐことも目的としている。このため、実習担当者会議で協議をしつつ、次のような教育方法を取り入れている。

- ・ **学外講師の招聘**：講義の内容に即した学外講師を招き、講義は60分(その間に学生は質問用紙に質問を記入)、質問用紙を回収した後の質疑応答を30分と定め、双方向型でやり取りをする習慣が身につくようにしている。
- ・ **学外実習**：地域の国際交流や国際協力団体が行う研修会に参加させ、身近な一般市民が地域や世界の課題に取り組む姿に触れる機会をもたせている。
- ・ **海外実習**：毎年1回は学生を海外に引率する海外フィールドワークを企画し、授業で学んだことを異文化交流の場で体験し、考えを深める機会を設けている。
- ・ **英語で開講する科目の運営**：留学生と同じクラスで、英語で授業を受ける体験を積むための科目を一つ開講するとともに、学生には12科目程度開講されているすべてのなかから一つは履修するよう勧めている。そのうち特に山口県に特化したトピックを扱う4科目「やまぐちスタディーズ」で地域に出て学ぶ体制をとっている。
- ・ **学内外向け発表会**：学外に出るための計画案を発表、中間発表会、最終発表会などの日程をたて、履修者全員が発表会を聞いてピアレビューを行うこととしている。
- ・ **教員が作成したテキストを使用**：テキストの作成・執筆は、教員間の議論を進め、能力向上につながる。

(資料F：LMS画面、地域実習先リスト、海外実習先リスト、質問カード、発表会日程)

3-3. 学びのプロセスや成果を形で見せるために

LMS (Learning Management System) は、学生の主体的な学習を促進するために有効な道具である。

一方、学びの成果を記録し、形で見えるようにするのがeポートフォリオである。eポートフォリオ「Progress Sheet」では4年間のゴールを定め、毎学期の目標を決めて、成果を記録する。

- **Webカルチャー運用科目**：1年生対象「国際関係論」「異文化交流論」、2年生対象「基礎演習」「フィールドワーク実践論」、3年生対象「地域実習Ⅰ」「地域実習Ⅱ」、4年生対象「卒業演習」などを運用している。
- **Progress Sheet**：履修モデルシート、キャリアシート、振り返りシートからなる。教員は学修指導記録シートをつけ、チューターが変わっても学修指導の履歴が蓄積されるようになっている。
- **ブックマラソン**：学部の教員が紹介する（各自6冊の新書）図書を購入し、基礎セミナーⅠで紹介し、10冊を読んだ学生には賞状をわたす仕組みを創設した。本は図書館ロビーで閲覧することができるようになっている。
- **ベストプロジェクト賞**：国際文化学科4年生を対象に、各研究室によびかけて教員が推薦して先行するベストプロジェクト賞を創設した。優れた卒業研修は学部の学位記授与式で表彰している。

(資料G：LMS画面、賞状、入学前教育資料)

4. 教育の成果

4-1. 授業評価

担当する授業科目の評価は添付の通りである。2008年の准教授から教授昇任の面接の際には、授業評価のスコアが4.5以上と高いことが認められた。他の高等教育機関においても、非常勤講師(宇部高等専門学校、5年生2クラス担当)におけるJABEEのもとでの授業評価でも、同様に高い評価を得ている。

(資料H：授業評価資料)

4-2. 国際理解教材の作成

学生や県内の国際交流・国際協力団体といっしょに「異文化交流論」「国際理解」で使用する教材を作成した。このプロジェクトに参加した学生は、その一部を卒業論文としてもまとめている。「文化の箱」「フォトランゲージ」の2種類教材は、現在、(財)山口県国際交流協会から県内の小中高校への貸し出し教材となっている。

4-3. 授業で使用するテキストの発行

「異文化交流論」「国際理解」の副読本として、学生とともに、県内の青年海外協力隊員からの異文化理解のエピソードを集めたものを編集し発行した。また、「異文化交流論」「基礎演習」「フィールドワーク実践論」「Yamaguchi Studies」4科目で使用するテキストを担当教員でチームを組み、企

画・作成・発行した。

4-4. 海外フィールドワーク報告書の公開

海外フィールドワークに関する報告書を発行するとともに、ホームページからもダウンロードして閲覧できるようにしている。また、グローバル関連のフォーラムにおいて写真を展示し、来場者に説明を行った。

4-5. 教育方法の改善に関する取り組みの発表

「国際理解」「異文化交流論」における指導方法の改善について、特に学生の主体的な学びを促進する教授法の観点から取り組み、成果について東北大学履修証明プログラムの公開報告会ならびに本学紀要等で公開した。

(資料 I : 教材、報告書)

5. 教育の改善

5-1. 個人として：研修への参加

教員としての教育力を向上させるため、さまざまな研修会に参加している。テーマは、学士課程の構築、グローバルスタンダードや国際基準、評価、LMSやeポートフォリオ構築と活用、大学教育改革等である。

平成25年度は特に、日本評価士学会の主催する評価士養成講座(大学評価、1週間)、東北大学の主催する大学教育改革ELP(Education Leadership Program、2年コース)に参加した。

また、本学におけるFD(ICT活用等)においても取り組みを紹介した。

(資料 J : 研修会資料)

5-2. 教員チームとして：テキストの発行

・テキスト『星座としての国際文化学』(青山社、2013年)の発行

国際文化学という学問領域を確立させるため、また、教員間で国際文化学という領域にコミットメントをするために、「基礎セミナーI」で紹介する国際文化学入門となるテキストを編集した。国際文化学とは何かという議論を通して、自分たちの教える領域に対する帰属感を養うことを目的に、編集過程を教育改善のFDと考えた。学生たちにはまた、国際文化学に対する誇りをもってほしいと願った。

・テキスト『フィールドワークの海に漕ぎ出すあなたへ』(みずのわ書房、2012年)の発行

国際文化学科の重点科目「フィールドワーク実践論」で使用するテキストを6名のチームティーチングのメンバーで執筆して発行した。15回の授業の組み立てについてチームで話し合ってきた内容を、目に見える形で学生たちに提供するとともに、テキスト編集の過程も教育改善のためのFDと考えた。

・テキスト『知の空へ飛びたとう—国際文化学部で学ぶあなたへ』(東洋図書出版、2014年)の発

行

国際文化学科の教員全員で、入学時から卒業時までを見据えたアカデミック・リタラシーの獲得に関するわかりやすいテキストを編集中である。入学時において、卒業までの4年間が見通せるような入門書を意図し、これまで基礎セミナーⅠ・Ⅱ、基礎演習、専門演習、卒業演習で行ってきた学科の指導体制や指導内容などをふまえ、アカデミック・リタラシーとして身につく力に焦点を当てて議論した。

・テキスト『Yamaguchi Studies- Your door to understanding the culture of Japan』(Okinawa-bunko. E-book、2015年)の発行

英語で開講する科目のうち、やまぐちスタディーズ4科目を担当する教員全員で、授業で使用するテキストを英語で電子書籍として発行した。ソニーブックス等から購入可能。受講生は主として交換留学生と本学で英語を学び交換留学を目指す学生。

(資料K：図書表紙と目次)

5-3. 学部として：外部資金の導入と学会全国大会の引き受け

・グローバル人材育成推進事業の採択

平成24年度に国際文化学部として文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル育成支援」事業の採択を得た。国際文化学部の教育の特徴である「言語教育」「海外留学」に加え、地域実習を発展させた「域学共創学習プログラム」と「産学公の域学連携コンソーシアム」というアイデアに沿って教育改革を進めている。

・日本国際文化学会全国大会の引き受け

国際文化学部は、日本国際文化学会設立(2000年)に先立つこと6年、1994年に発足し、歴代の常任理事には国際文化学部長が就任してきたという経緯をもつ。教授会の承認を得て、日本国際文化学会事務局を国際文化学部事務室内に置いている(平成25年度～28年度)。また、平成26年7月には第13回国際文化学会引き受けを行い、学部として取り組んだ。

(資料F：グローバル資料、学会資料)

6. 今後の教育目標

6-1. 一年以内の短期的な目標

- ・『異文化交流論』で使用するテキストを刊行すること。
- ・英語で開講する授業の質を高め、グローバルスタンダードに見合う内容と教授法を磨くこと。

6-2. 五年をめどにした長期的な目標

- ・副学長の職務が増え、私が担当する科目数を減らす必要が出てきている。後継者をつくるべく引き継ぎを行っていく。
- ・特に大学院レベルや大人数のクラスにおいて反転授業を活用した科目を運営する。